

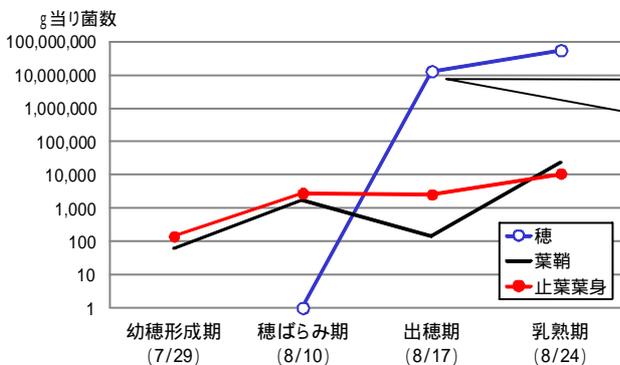
# イネの穂枯性細菌病を防ぐ技術

気候温暖化に伴い「内穎褐変病(ないえいかつびょう)」、「もみ枯細菌病」など、イネの穂枯性細菌病が発生して、イネの種子生産に障害が出ています。そこで、それらの病気を効果的に防ぐ方法を開発しました。

『内穎褐変病菌』は、穂が出る前 20 日頃に粒状の農薬を 3kg/10a まき、穂が出始める頃に液状の農薬を散布すると、効果的に防ぐことができます。

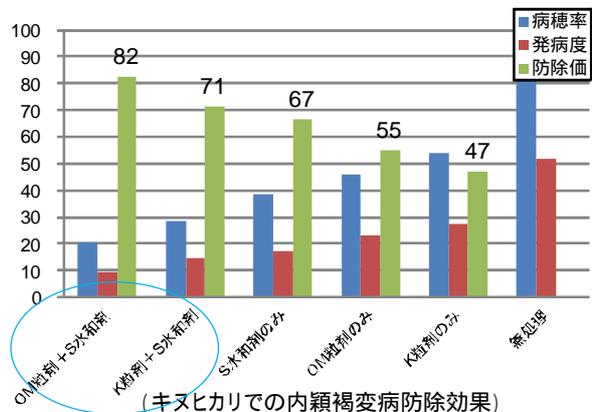
『もみ枯細菌病』では、種子を 15 分間 60℃ の湯に漬けて消毒してから育苗し、穂が出る前に粒状の農薬をまき、穂が出始めた頃に液状の農薬を散布すると防ぐことができました。

## 1 内穎褐変病



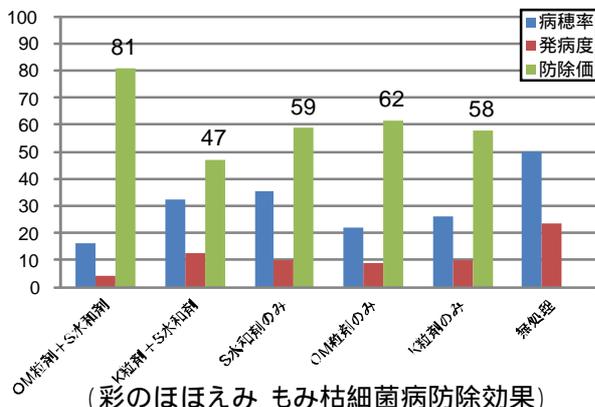
(水稲「キヌヒカリ」での内穎褐変病菌の菌数)

穂が外に出る前は病原菌は見られませんが、外に出る(出穂)とすぐに菌が付着し、急激に増殖することが明らかとなりました。



穂が出る 20 日前頃に、プロベナゾール粒剤 (右のグラフではOM)、またはピロキロン粒剤(グラフではK)を施用し、穂の出始めにオキシロニック酸水和剤(グラフではS)を散布すると、効果的に内穎褐変病を防ぐことができます。

## 2 もみ枯細菌病



(彩のほほえみ もみ枯細菌病防除効果)

種子を 60℃・15 分間で温湯消毒して育苗・田植えをします。

穂が出る 20 日前頃にプロベナゾール粒剤(左のグラフではOM)を 3kg/10a 施用し、穂の出始めにオキシロニック酸水和剤(グラフではS)1,000 倍液の散布により、防除効果が得られます。